鹿児島ならではの「本物」の個性を大切にして欲しい。

NHK鹿児島放送局長
清水 幹夫氏

昨年は大河ドラマ「西郷どん」の放送を熱くご支援下さり、改めて御礼を申し上げます。平均視聴率は関東地区12・7％　関西地区15・8％　北部九州地区が17・2％そして鹿児島地区が30・2％でした。ドラマの中で私が最も好きだったのがオープニングタイトルです。桜島や高千穂峰をはじめ妙円寺詣りや霧島九面太鼓、さらには雄川の滝や奄美の海など、鹿児島の皆さんが大切にしてきた誇るべき自然・文化を次々に紹介する形になったからです。

私は昭和59年4月にNHKに放送記者として入局しました。以来、青森→東京→福岡→鹿児島→東京→福岡→東京→名古屋→東京→鹿児島と「流浪人」のように転勤してきています。東京では関東甲信越を、名古屋では東海北陸を広域的に担当しました。国内の各地を見聞きしてみると、地方色が薄れてきている所が多いように感じます。そうした中で最も「地方色」が強烈だったのが初任地の青森です。滋賀県で生まれ育った私が初めて経験することが多かったからです。

その第一の経験が冬の豪雪です。当時は青森市の市街地でも2m近くの積雪がありました。こうなると移動手段は車になりますが雪道の運転は非常に難しいものです。夜になって雪道がアイスバーンと化しますと緊張を超えて恐怖を感じながらハンドルを握ったものです。

地元の皆さんへの接し方も気を使いました。青森の方言は慣れないうちは難解であるうえ、「じょっぱり」と称される気質の人が多かったように思います。取材で苦労することもありました。そして食事です。煮干しだしのラーメンやホヤ、じゃっぱ汁などはこれまで食べたことが無かったので最初は敬遠することもありました。今から考えると随分、勿体ないことをしてしまったようです。

最初はとっつきにくいと感じた青森でしたが、1年も経つとこの個性的な風土には「噛めば噛むほど味が出る」という魅力があることを知るようになります。煮干しのラーメンやじゃっぱ汁も飲酒後のしめに欠かせなくなってしまいます。仕事のうえでは、青森の良さを全国に紹介したい、という思いが強まってきます。最近、青森への外国人宿泊者数が非常に増えているというニュースを見ます。航空便の充実などが背景にあるようですが、青森の個性的な風土も観光客を呼び込んでいる一因になっていると信じたいところです。

さて今、鹿児島局で仕事をしていますと、青森が妙に懐かしく思い出されます。鹿児島港を行き来する船からの汽笛が、廃止された青函連絡船を思い出させるのです。だからと言って今すぐ青森に行ってみたいという気分にはなりません。鹿児島も十分に個性的な土地柄で、仕事や生活をしてみて飽きないからです。2月上旬に北薩地方を巡るバスツアーに参加しましたが、鹿児島にはまだ広く知られていない名所・名物が多いことを痛感しました。

私はまもなく定年退職、時間を持て余してしまうことでしょう。その時は鹿児島を再び旅して在勤中に行けなかった名所を訪ねて回りたいと思います。私のような「流浪人」のためにも皆さんには「鹿児島ならでは」を頑なに守り続けて戴きたいと願っております。

昭和35年8月　滋賀県生まれ　58歳
昭和59年4月～　NHK入局　青森放送局記者
平成元年 7月～　東京報道局社会部記者
平成7年 7月～　福岡放送局記者
平成9年 7月～　鹿児島放送局デスク
平成12年6月～　東京放送総局首都圏センター取材デスク
平成16年6月～　福岡放送局副部長
平成19年6月～　東京放送総局首都圏センター
・チーフプロデューサー
平成22年6月～　名古屋放送局報道部長
平成25年6月～　東京報道局おはよう日本部
・エグゼクティブプロデューサー
平成27年6月～　東京放送総局ラジオセンター
・エグゼクティブプロデューサー
平成28年4月～　鹿児島放送局局長

NHK鹿児島放送局　局長
清水　幹夫氏